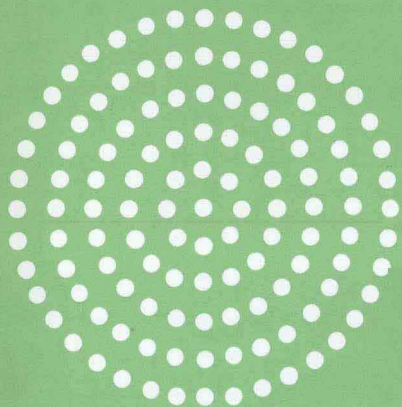


日本の詩集 7

佐藤春夫詩集





日本の詩集

7

佐藤春夫詩集

昭和四十三年十二月十日 初版発行
昭和四十七年十一月十日 六版発行

著者 佐藤春夫

発行者 角川源義

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
①〇二〇東京一九五二〇八
電話東京(六)七二二(大代表)

印刷カラー 暁美術印刷株式会社

本 文 暁印刷株式会社

函・扉 暁美術印刷株式会社

製函 川合紙器加工所

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571907-0946(1)

目次



詩集
殉情詩集

同心草

水辺月夜の歌

或るとき人に与へて

また或るとき人に与へて

海辺の恋

断章

琴うた

後の日に

よきひとよ

こころ通はざる日に

なみた

感傷肖像

感傷風景

昼の月

ためいき

少年の目

二の小唄

むかし、
いかなる人のいかなるを

りにやのこしたりけむ、かかる恋

慕の秘曲ひとふしあり。

昼の月

心の廃墟

心の廃墟

断片

わが溜息

メフェイストフェレス登場

夜深くして歌へるわが歎きの歌

聖地パレスチナ

詩集 我が一九三二年

秋刀魚の歌

浴泉消息

或る人に

冬の日の幻想

同心草拾遺

つみ草

別離

竜胆花

詩集 佐藤春夫詩集

幼き歌

夕づつを見て

犬吠岬旅情のうた

秋の夜

嫁ぎゆく人に

同心草（補遺）

淡月梨花の歌

うぐひす

寒蟬鈔

しぐれに寄する抒情

秋の女よ

消閑雜詩

遠き花火

支那の詩より

オルゴオルにそへて弟に与ふ

孤寂

故園晚秋の歌

漳州橋畔愁夜曲

暮春のすみれ

うつろなる五月

心を人に与へ得て

堀口大學に与ふ

鳩

詩論

青楼の团扇に題す

蘇台竹枝より

海の若者

私の桂時計

十三時

喜劇

なぞく

申し開き

願ひ

冬夜微吟

ひそかに己が詩集に題す

やまぶき

キイツの艶書の競売に附せらるる

とき

支那歴朝
名媛詩鈔 車塵集

音に啼く鳥

薔薇をつめば

女ころも

蝶を詠める

水彩風景

行く春の川べの別れ

おなじく

川ぞひの欄によりて

乳房をうたひて

恋愛天文学

採蓮

秋の別れ

もみぢ葉

思ひあふれて

秋の滝

残燈を咏みて

つれなき人に

詩集 魔 女

現代のダンテ

わが秋の歌

故事二篇

砂金採り

不実な涙を

「真実」の狩人

カリグラム

家出人人相書

諺

僕は愛する

四行詩

女を論ず

恋の墓碑銘

佐藤春夫詩集（補遺）

幼き歌

一節ぎり

わがはたち

一〇五

後期問答

一〇六

俳諧詩

一〇七

酒、歌、煙草、また女

一〇八

詩文集 閑談半日

溼日漫詠

望郷五月歌

詩集 小園歌

小園歌

詩集 東天紅

伊良古廬

詩詞集 小杯余瀝集

慵斎雜詩

田家雪

春風二十四番曲詞

詩集 佐久の草笛

山中消息 その一

村は晩春

首 夏

くわくこう

一〇五

一〇六

一〇七

一〇八

一〇九

一一〇

一一一

一一二

一一三

一一四

一一五

一一六

一一七

一一八

一一九

一二〇

一二一

一二二

一二三

一二四

一二五

一二六

又

ロずさみ

戦は破れんとして

柿もみぢ

秋の小虫

長き夜を

山中消息 その三

聴雪

雪の浅間山

釣瓶を拾ふ者に

凍み豆腐

又

又々

寒さ

頬白の歌

見てあれば

四月一日日記

好日

山中曆日

支那詩選

玉笛譜

唐詩黃絹幼婦抄

古意

春江花月夜

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

君を送りて

鹿柴

竹里館

宋中

おなじく

蠅と蚊

都の春を

長安道

木な植ゑそ

蘇小小の墓

秋日

おぼろ夜

秋ゆふべ

をとめさび

詩文集 まゆみ抄

樹下石上の歌

浅間の噴火を見て

詩集 抒情新集

老殘歌

貝がら

意馬心猿歌

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

一六

詩集 定本 佐藤春夫全詩集

未刊行詩集 春夫詩存

愚者の死

二〇八

小曲二章

三〇

病

三〇

煙草

三〇

清水正次郎を悼む長歌并短歌

三三

夜毎わが心のうたふ歌

三四

同時代私議

三七

乃木大将を悼む言葉

三七

乃木大将の死に就いて世の新聞

三八

記者に言ふ

三八

詩文集 詩の本

帰去来歌

三三

解説

評伝

鑑賞

詩の旅

年譜

ばんばん歌

三三

マロニエ花咲きぬ

三七

天馬行

三三

渚の薔薇

三三

雑纂詩稿

狂想三部曲

三三

陽春狂想曲

三三

賭け事

三三

*

歌謡

三〇

写真協力

大神達夫・島崎博成・白旗史朗・遠山孝之
前田真三・緑川洋一・村田吉行

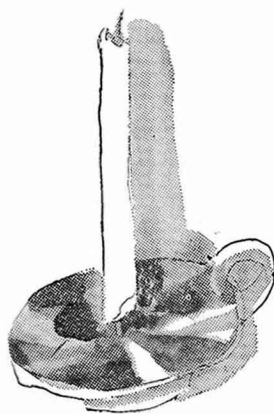
山本健吉 三三

吉田精一 三三

大竹新助 三三

二六

佐藤春夫詩集



詩集

殉情詩集
じゆんじやう



同心章

水辺月夜の歌

せつなき恋をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。
げにいやしかるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

或るとき人に与へて

片^{かた}こひの身にしあらねど
わが得^えしはただこころ妻
こころ妻こころにいただき
いねがてのわが冬の夜^よぞ。
うつつよりはかなしうつつ
ゆめよりもおそろしき夢。
こころ妻ひとにだかせて
身も霊^{たま}もをのきふるひ
冬の夜のわがひとり寝^ねぞ。

また或るとき人に与へて

しんじつふかき恋あらば
わかれのころな忘れそ、
おつるなみだはただ秘めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
数ならぬ身といふなれ、
ひるはひるゆゑわするとも
ねざめの夜半におもへかし。

海辺の恋

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき、
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。

わらべをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手を取りぬ
かひなきことをただ夢み、

入り日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなさは
こぼれ松葉の火なりけむ。

断章

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、花ちりぬ。